夏目漱石「三四郎」論　佐々木与次郎についての考察～物語を紡ぐ男～

岡本 直茂

【抄録】

本論文は、夏目漱石の代表作の一つである「三四郎」の主人公三四郎の友人であり、この作品が展開するうえで、欠かせない人物である佐々木与次郎の役割について考察した。佐々木与次郎という人物は、この人がいなければ「三四郎」という物語を形成できない重要な位置にありながら、従来の先行研究であまり取り扱われることのない人物であり、しかし「三四郎」を読みとくうえで、語るのを避けて通れない人物である。本論文では、与次郎という人物の果たしている役割、その「トリックスター」としての側面について述べ、与次郎という人物の名前に寄せられた意味についても考察を加えた。

【キーワード】
道化、愛すべき悪戯、教養小説、トリックスター、老子

はじめに

この論考では、夏目漱石の代表作の一つである「三四郎」について、主人公三四郎の友人であり、この作品の物語を作り上げている重要な登場人物である佐々木与次郎について述べていきたい。

以前、論者は「三四郎」は佐々木与次郎の存在によって成り立っている部分が大きく、このことについて研究者があまり述べていないことを問題提起したことがある（注一）。それから十年近くたっているが、依然として与次郎について正面から述べた先行研究は少なく、管見に入ったものでは、斉藤英雄が「「与次郎」と「夜空」と「偉大なる暗闇」--「三四郎」側面」（注二）において与次郎について書いているほかには、木村毅が「早稲田大学と夏目漱石--「三四郎」の与次郎をめぐりて」（注三）を書いて、与次郎をめぐって当時の時代考証を踏まえた論文を書いているのを見るほかには、和田利男の著書『漱石文学のユーモア』（注四）や、吉村英夫が単著『愛の不等辺三角形　漱石小説論』で与次郎についてまとまって言及しているのを見るばかりである。（注五）

「三四郎」での登場人物のなかでは、主人公三四郎をべつにすれば、ヒロイン里見美禰子、理学者野々宮宗八、英語教師である広田先生などへの言及は多く、ことに昨今の研究では、三四郎が登場する前からあった美禰子と野々宮との関係について述べたものが多くみられる。こうした研究の重要性は言うまでもなく、近年の研究において「三四郎」に対する作品理解は深まっているように思われる。しかしながら、これだけ様々な研究がなされているなかにおいて、「三四郎」の登場人物のなかでも、「三四郎」の物語を形作る決定的な役割を果たしている佐々木与次郎について触れたものが、ほとんど見られないというのは論者にとって不思議でならない。論者の見るところ、佐々木与次郎こそ、美禰子と野々宮や広田先生

など三四郎が登場する前から、東京帝国大学を中心とした本郷界隈にて活躍していた主要な人物と三四郎をつなぎ、「三四郎」を読者の手にもつないだ重要人物なのである。「三四郎」は夏目漱石が朝日新聞に入社して、「虞美人草」「坑夫」「夢十夜」を書いてから新聞小説家として円熟の域に達してから書かれた小説であり、当時の朝日新聞読者を中心とした読書人の読書意欲をかき立てるべく書かれた、流行小説としての一面を持っている。確かに夏目漱石は巨大な知識人であり、真剣に論じられるべき存在であるが、これまでの先行研究は漱石の真摯な研究を深めようとするあまり、快活で俗気のかたまりであるようで、「三四郎」のすべての登場人物とつながり、巧みにこの小説のストーリーを作り上げる重要な役割を果たしている、佐々木与次郎という存在を見落としてしまっているようにも思われる。

この論考では、「三四郎」において与次郎が果たしている役割を読みとくとともに、佐々木与次郎という登場人物が持つ個性が、この作品をどのように彩っているか考えてみたい。「与次郎」という名前に込められた隠された意味も、そのなかで浮かび上がってくると考えている。以前に書き上げた論文からさらに考えを深め、「三四郎」について論者なりの新たな視座を示すことができれば幸いである。

なお、本論文では『漱石全集第五巻　坑夫・三四郎』（岩波書店、平成六年四月十一日）を底本とした。

一、与次郎の役割～登場人物をつなぐ男

「三四郎」の主人公と言えば、言わずと知れた福岡県出身の東京帝国大学文科大学生の三四郎であるが、作中、三四郎が大学に入学して授業が始まってから最初に親しく口をきくのが同じく帝大の選科生である佐々木与次郎である。文学論の講義を聞いていると、隣にいる男が熱心にノートをつけているかと思って三四郎が見ると「のぞいて見ると筆記ではない。遠くから先生の似顔をポンチにかいていたのである。」（三）という。決してまじめな人物としては描かれておらず、大学に入学して早々の三四郎に「大学の講義はつまらんなあ」（三）と話しかける。そのうえ、大学の授業を律儀に出席し週に四十時間講義を聞いているという三四郎を「ばかばか」（三）と言って、ともに電車に乗り、酒をすすめ、寄席に連れていく。あたかも三四郎の学業を邪魔するようなことをするかと思えばいっぽうで、

> 小さんは天才である。あんな芸術家は滅多に出るものぢやない。何時でも聞けると思ふから安つぽい感じがして、はなはだ気の毒だ。実は彼と時を同じうして生きてゐる我々はたいへんな仕合せである。今から少し前に生れても小さんは聞けない。少し後れても同様だ。――円遊も旨い。然し小さんとは趣が違つてゐる。円遊の扮した太鼓持は、太鼓持になった円遊だから面白いので、小さんの遣る太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だからおもしろい。円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物が丸で消滅して仕舞ふ。小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隠したつて、人物は活潑々地に躍動する許りだ。そこがえらい。（三）

と噺家柳家小さんについての粋な見解を見せるのである。大学生として取るべき態度としては、週に四十時間講義を聞いている三四郎のほうが、模範的で優等生のとる態度をとっていたと言えるだろう。しかし、三四郎自身はそんな日々に三四郎は「圧迫を感じ」「物足りない」という。そんなところに親しくなった与次郎が、大学の授業と関係のない遊びに連れ出したかと思えば、そこに小さんについての一流の風流人とも言えるような論評を聞かせるなどして、結果として三四郎は与次郎に「物足りた」と言うのである。こうしたところからして、三四郎を大学の中というある意味狭い世界から引っ張り出して、大きな世界を見せる役割を与次郎は果たしているのである。人騒がせではあるが、結果として三四郎を納得させてしまう力を与次郎は有しており、その力を存分に発揮させてしまうのが「三四郎」という小説でもある。それは「吾輩は猫である」で迷亭が果たした役割と同じでもあり、人をもめ事に巻き込みながら、物語を推し進め盛り上げていく「狂言回し」であり、シェイクスピアの劇などにもしばしば登場する「道化」としての役割を果たしているといえる。与次郎は夏目漱石自身が「三四郎」という作品を成立させるために生み出された作者の分身とも言えよう。吉村英夫は次のように述べている。（注六）

> 佐々木与次郎。漱石の長編小説の副次的人物で、もっとも個性的で生きいきしているひとりである。彼が出てくると、ぱっと明るい雰囲気が漂い、気分が和らぐ。あちこちに波風が立ち、同時に小説世界も動き出す。三四郎の同級生だが、以前から書生をしながら本郷の大学界隈で、飄々と歩き回っている男である。なんとも憎めない雰囲気をもち、三四郎に東京での学生生活のあり方を指南する。学校のこと。世渡りのこと、その他もろもろ。「電車に乗るがいい」といって、路面電車で東京中をまわるのをすすめる。たしかに東京のことが少しずつわかるような気がする。

夏目漱石は「吾輩は猫である」で作家としての活動を始め、それから「坊っちゃん」をはじめ、ユーモアに富んだ作品を初期のころに多く著しているが、与次郎という人物はそうした夏目漱石の初期の作品の登場人物の系譜を受け継ぎ、漱石の作品のなかでもとりわけ陽気さを持った人物として現れている。そして小説世界を動かす役割を担っており、この人物がいなければ「三四郎」は成り立たない重要な登場人物である。主人公ではないが、主人公である三四郎が持ち合わせていない行動力を持ち、「三四郎」という物語を紡ぎだしていくのである。

「三四郎」という小説の主な物語は、主人公三四郎と美禰子の恋の物語であり、あるいは近年の研究でとみに指摘される野々宮と美禰子の恋の物語でもある。しかしながら、「三四郎」に現れる登場人物の人間関係の全体像をおよそとはいえ把握している人物は与次郎と、その寄生している広田先生だけであり、なおかつ三四郎と学生生活をともにしているのは与次郎のほかにいない。

「三四郎」において与次郎は前述のように登場し、三四郎を東京の生きた世界のなかに誘うわけであるが、三四郎と同郷の理科大学で物理学を研究する野々宮とも知己であるし、「三四郎」に出てくる登場人物のをつなぎ、物語を動かしていく。三四郎が秋の日にぶらつ

いている時に、与次郎が三四郎を見つけて「おい」と声をかける。（四）そこで与次郎とともにいるのが、三四郎が上京の途中の汽車で知り合った「水蜜桃の男」こと広田先生である。与次郎は広田先生を紹介しようとするが、広田先生は「知ってる、知ってる」とそれを遮る。それでも与次郎は「なぜ知ってるんですかなどと面倒なことは聞かな」い。しかし、与次郎が広田先生のことをよく知っていなければ、三四郎と広田先生が再会することも簡単ではなく、与次郎がいるからこそきわめて円滑に広田先生との人間関係も構築されていく。ここも作者の意図を感じるところであり、事実、与次郎は「妙な顔」をする。言ってみれば天の配剤であり、創作者漱石のたくまざる意志を見るところである。また、広田先生が引っ越しをするときに与次郎は三四郎に手伝いを依頼するのだが、ここで「偶然に」三四郎は広田先生と旧知でもあった美禰子とも再会を果たすのである。ここまでの経緯のすべてが、与次郎がいるからこそ成立するのであり、与次郎の活発な交際や人脈なくして三四郎を中心とした「三四郎」という物語は生まれえないのである。

そして、主人公である三四郎は美禰子に好意を示すようになり、美禰子と親しくなるが、美禰子に「迷える子（ストレイシープ）」と、どうしてそのようなことを言うのかわからない言葉をなぞかけのようなことを語りかけられ、その後の大学の授業中もノートに「stray sheep」と同じことばかり書き連ね、すっかり美禰子に心を奪われてしまうのであるが、注目すべきことはそんな状態にありながらも与次郎の書いた「偉大なる暗闇」という広田先生を称え、帝大教授として迎えようとする与次郎の意図により書かれた論文を読んでいるときは、美禰子のことを忘れていられるのである。

> 三四郎は好い気になって、此方を筆記したり、彼方を読んだりして行つたが、もとく二人でする事を一人で兼ねる無理な芸だから仕舞には「偉大なる暗闇」も講義の筆記も双方ともに関係が解らなくなつた。たゞ与次郎の文章が一句丈判然頭へ這入つた。
> 「自然は宝石を作るに幾年の星霜を費やしたか。また此宝石が採掘の運に逢ふ迄に、幾年の星霜を静かに輝やいてゐたか」といふ句である。その他は不得要領に終つた。其代り此時間には stray sheep といふ字を一つも書かずに済んだ。（六）

「三四郎」という小説は、ヒロインともいえる美禰子の存在が大きく、先行研究を見ても美禰子と三四郎、あるいは美禰子と野々宮について論じたものは多い。美禰子の持つ「露悪家」であるとか、「無意識の偽善」といった言葉で「三四郎」において表される個性は同時代の小説にないような生き生きとした女性像を描いており、かように魅力的な女性として美禰子は描かれるわけであるが、与次郎という人物は、広田先生を東京帝大の教授として迎えるための運動に熱中しており、美禰子とはまるで関係のないような生き方をしている人物である。その人が書いた論文がどういうことか、一時は三四郎から美禰子のことを忘れさせる力も持っていることがここに伺えるのである。恋愛小説として語られることの多い「三四郎」であるが、男女の恋愛物語としての性格を持っているだけではなく、三四郎を中心とした明治期の青年群像を描いた小説でもあり、実際に三四郎のモデルは漱石の弟子の小宮豊隆、与次郎のモデルも同じく弟子であり児童文学者の鈴木三重吉と言われ、野々宮のモデルは理

学者の寺田寅彦であることは間違いないこととされる。こうした事実も踏まえて考えると、夏目漱石の当時の若者たちに向けた暖かい視点も垣間見ることができるのである。

この後、美禰子から三四郎と美禰子を「迷羊」と見立てた絵端書を受け取り、三四郎は満足し、「偉大なる暗闇」への関心は薄くなるが、三四郎は広田先生が引っ越した西片町に向かうと、広田先生と与次郎の意外な美禰子についての批評を聞くことにもなる。

「あの女は落ちついて居て、乱暴だ」と広田がいった。
「ええ乱暴です。イブセンの女のようなところがある」
「イブセンの女は露骨だが、あの女は心が乱暴だ。もっとも乱暴といっても、普通の乱暴とは意味が違うが。野々宮の妹の方が、ちょっと見ると乱暴のようで、やっぱり女らしい。妙なものだね。」
「里見のは乱暴の内訌ですか。」
三四郎は黙って二人の批評を聞いていた。どっちの批評も腑に落ちない。乱暴という言葉が、どうして美禰子の上に使えるか、それからが第一不思議であった。（六）

三四郎の美禰子に対して夢中になっており、美禰子のことを客観的に見られないことは先の「迷える羊」の件でも明らかである。物語の後半では、「三四郎は美禰子をよそから見ることができないような眼になっている。第一よそもよそでないもそんな区別はまるで意識していない」（十）とも描かれている。三四郎は優れた頭脳を持っていはいるだろうが、実際に生きている都会の女性であるとか、同時代の自意識をしっかりと持ったいわゆる「新しい女」と呼ばれるような進んだ女性の存在については、まるで無知であると言っても過言ではない。それが、広田先生と与次郎の会話を通して浮き上がってくるところである。また、与次郎と二人になったときは次のような話を交わす。

「つまらんなあ我々は。あしたから、こんな運動をするのはもうやめにしようかしら。偉大なる暗闇を書いても何の役にも立ちそうにもない」
「何故急にそんな事をいいだしたのか」
「この空を見ると、そういう考えになる。――君、女に惚れた事があるか」
三四郎は即答ができなかった。
「女は恐ろしいものだよ」と与次郎がいった。
「恐ろしいものだ。僕も知っている」と三四郎もいった。すると与次郎が大きな声で笑い出した。静かな夜の中で大変高く聞える。
「知りもしないくせに。知りもしないくせに」
三四郎は憮然としていた。
「明日も好い天気だ。運動会は仕合せだ。綺麗な女が沢山来る是非見にくるがいい」
暗い中を二人は学生集会所の前まで来た。中には電燈が輝いている。（六）

ここで、三四郎は与次郎に女性に対する無知をからかわれるのであるが、実際、物語の出だ

しでは、汽車のなかで道連れになった女性に翻弄され、「二十三年の弱点が一度に露見したような心持」（一）を味わい、美禰子からもらった絵端書に心を奪われるような純朴な青年として三四郎は描かれており、自立した意志を持った女性のことを意識し始めたところと言ってよい。与次郎のこうした指摘は現在の三四郎のありのままの姿を明るく、かつ端的に示して鋭いものがある。与次郎は三四郎に対してまったく無理解というわけでもなく、同年代の友人に対する共感は持ちつつ、距離を持って三四郎の現実の姿を示す人生の先輩であり、物差しのような役割も果たしているともいえるのではないか。そして、「綺麗な女」である美禰子もいる運動会にも三四郎を誘うのである。そこで、美禰子や野々宮、野々宮の妹のよし子とも出会う。ここで、三四郎は野々宮と自身の学問や見識の違いを比較して考え、自己嫌悪にも陥る。「三四郎は気がついて、今日まで美禰子の自分に対する態度や言語を一々繰返してみると、どれもこれもみんな悪い意味がつけられる。三四郎は往来の真中で真赤になって俯向いた。」（六）といった様であり、言ってみれば与次郎に仕向けられた行動の結果、現実を知り、客観的に見た自分の立場ということも少しずつ見えてくるのである。

二、「愛すべき悪戯」の物語としての「三四郎」

ここまで、与次郎という学友と出会ったことにより、三四郎が大学という枠にはめられず、広く東京という町そのものに触れて、同時代の激しく動く日本の空気そのものに触れ、そして物語の主要な登場人物と知り合うところを見てきた。与次郎という人物は帝国大学の選科生ということもあずかって、三四郎ら大学の本科生として大学の中心を担うべきところから外れており、三四郎とは無関係ではないがアウトサイダー的な存在でもあり、三四郎とはちょうどいい距離感にある人物であったともいえよう。それだけではなく、広田先生を大学教授にしようと積極的な活動をして、直接世間に関わっていこうとする人物でもある。三四郎は作中で「低徊家」（四）とも評され、自ら進んで行動することの少ない人物でもある。作中の描写を見る限り、一人では物事を起こすことができない人物とも見える。同じことは広田先生などにも言え、与次郎がいなければこの物語は処女作「吾輩は猫である」などと同じように、登場人物が好んで世の中と関わらない、起伏の小さい話に終っていた可能性もあると思う。それを大きく変え、結果的に夏目漱石の作品のなかでも前期と後期を分ける役割を果たす象徴的な人物が、与次郎という人物でもあるとも考えるのである。

事実、三四郎は与次郎の起こした「借金事件」のため、美禰子との関係を接近させることになる。まずは与次郎が金をなくす場面を見たい。

> 与次郎の失くした金は、額で二十円、ただし人のものである。去年広田先生がこの前の家を借りる時分に、三カ月の敷金に窮して、足りない所を一時野々宮さんから用達ってもらった事がある。しかるにその金は野々宮さんが、妹にヴァイオリンを買ってやらなくてはならないとかで、わざわざ国元の親父さんから送らせたものだそうだ。それだから今日が今日必要というほどでない代りに、延びれば延びるほどよし子が困る。よし子は現に今でもヴァイオリンを買わずにすましている。広田先生が返さないからである。先生だっ

て返せればとうに返すんだろうが、月々余裕が一文も出ない上に、月給以外にけっして稼がない男だから、ついそれなりにしてあった。ところがこの夏高等学校の受験生の答案調を引き受けた時の手当が六十円この頃になってようやく受け取れた。それでようやく義理をすます事になって、与次郎がその使いをいいつかった。
「その金をなくしたんだからすまない」と与次郎がいっている実際すまないような顔付でもある。どこへ落としたんだと聞くと、なに落としたんじゃない、馬券を何枚とか買って、みんななくしてしまったのだという。三四郎もこれには呆れかえった。あまり無分別の度を通り越しているので意見をする気にもならない。その上本人が悄然としていの対照が烈しすぎる。だから可笑しいのと気の毒なのとがいっしょになって三四郎を襲って来た。三四郎は笑い出した。すると与次郎も笑い出した。（八）

これが与次郎が金をなくした話のくだりであるが、そもそもは広田先生が野々宮から借りた金をあずかり、それをなんと馬券に使ってしまうというのである。二十円というと、帝大で教えている野々宮の月給が五十五円とある（三）ことから言っても相当な金額である。それを競馬に使う神経はさすが見事な与次郎の大胆不敵さであるが、さしもの与次郎が「悄然」とするあたりは与次郎の個性の豊かさを表しており、三四郎も笑い出してしまう。それに与次郎もいっしょになって笑うあたりの描写は、三四郎の与次郎に対する理解をよく描き出しているし、与次郎自身も我が身のおかしさを省みるところでもあり、実は三四郎と与次郎が深いところで分かり合う友人でもあることを、鮮やかに描き出している場面でもある。これに対して三四郎は実に「金はここにある」と、国元からの送金を貸してしまうのである。竹本公彦は次のように述べている（注七）

三四郎にとって彼は良いアドバイスをくれる貴重な友人なので、三十円という大金の尻拭いをしたのだろう。そのため三四郎は金を母に無心して、手紙で大金を貸したことを意見されることになるのだ。だが三四郎は、與次郎から既に三十円以上の価値があるものを受け取っている。

与次郎という人物は、三四郎にとって「悪友」とでも言うべき存在であるが、与次郎なくして、三四郎の魅力的な大学での生活もないのであり、二十円もの大金を貸すというのは、考えが浅いゆえのことではなく、与次郎という人物に大金を貸すだけの魅力を感じ、与次郎を助けることにどこかしら意義を感じて、与次郎という人間にいわば「投資」をしているのだとも言えよう。しかしながらなんとその借金の返済を、与次郎と美禰子が話して美禰子が用立てるということになるのである。

「お金はここにありますが、あなたには渡せませんというんだから、驚いたね。僕はそんなに不信用なんですかと聞くと、ええといって笑っている。厭になっちまった。じゃ小川をよこしますかなとまた聞いたら、え、小川さんにお手渡し致しましょうといわれた。どうでも勝手にするがいい。君取りに行けるかい」

「取りに行かなければ国へでも電報でも掛けるんだな」
「電報はよそう。馬鹿げている。いくら君だって借りに行けるだろう」
「行ける」
　これでようやく二十円の埒が明いた。（八）

学生の立場で二十円という決して少なくない金の貸借をするだけでもそれなりの出来事であるが、それを近代化して間もない明治期の女性が自らの金で用立てるというのであり、簡単に書かれているが通常ありえないようなまさに大胆なことが、与次郎の借金を通して起こっているのである。当時の独身女性として、自ら金を用意して三四郎に貸そうという美禰子が大胆であるのはむろんだが、与次郎の「不信用」とも言われる人を食った自由闊達な振る舞いが、こうした事態を引き起こすのである。そして、この件を通して三四郎は美禰子とまた近づき、最後には美禰子が「立派な人」と結婚するその現実にも立ち会うのである。与次郎が一面、恋の仲介人としての役割も果たし、「三四郎」の一番目立ったストーリーの中心ともいうべき、三四郎と美禰子の恋物語、あるいはその前からあった野々宮と美禰子の物語も明らかになってくるのである。このついには美禰子をも巻き込む借金事件の原因は、与次郎の好き勝手が招いた失敗であるが、与次郎はそれを自身の失敗という問題だけでは済まさず、三四郎の恋愛を進めるきっかけとしている節さえある。事実、広田先生らが集った静養軒の会の帰りには三四郎と与次郎は次のように会話を交わす。

　三四郎には只可笑しい丈である。其外には何等の意味もない。高い月を仰いで大きな声を出して笑つた。金を返されないでも愉快である。与次郎は、
「笑つちや不可ん」と注意した。三四郎は猶可笑しくなつた。
「笑はないで、よく考えてみろ。己が金を返さなければこそ、君が美禰子さんから金を借りる事ができたんだらう」
　三四郎は笑ふのをやめた。
「それで？」
「それ丈で沢山じゃないか。―君、あの女を愛してゐるんだらう」
　与次郎は善く知つてゐる。三四郎はふんと云つて、又高い月を見た。月の傍に白い雲が出た。
「君、あの女には、もう返したのか」
「いゝや」
「何時までも借りて置いてやれ」
　暢気なことを云ふ。三四郎は何とも答へなかつた。しかし何時迄も借りて置く気は無論無かつた。（九）

三四郎と与次郎の間には金銭の貸し借りによる、世間の利害や損得を超えた味わい深い友情が成立しており、金のことなど関係なく笑いあえる間柄となっていることがよくわかる。与次郎が登場する場面は、いつも楽しみがあり滑稽さをともなっているが、決してそれだけ

では終わらず、三四郎が美禰子を愛していることを指摘し、与次郎が実に見事に三四郎の心中を見抜いていることがわかる。「三四郎」という作品は、まじめな三四郎に与次郎という人生経験をある程度積んだ個性あふれる愉快な人物が現れて、大学の勉強だけではない人生の一側面を見せることにより、ユーモア小説の要素を持たせつつも、当時の大学生の生き方をわかりやすく示し、若者の生き方について考える小説となっている。先の論者による論文でも述べたことであるが、（注八）その意味において、長谷川泉らのいうように「教養小説」としての性格の強い小説でもある。（注九）

また、与次郎は三四郎と美禰子の間柄にさらに踏み込んで問を発する。

「あの女は君に惚れてゐるのか」
二人の後から続々聴講生が出て来る。三四郎は已むを得ず無言の儘階子段を降りて横手の玄関から、図書館の傍の空地へ出て、始めて与次郎を顧みた。
「能く分らない」
与次郎は暫らく三四郎を見てゐた。
「左う云ふ事もある。然し能く分つたとして。君、あの女の夫（ハスバンド）になれるか」
三四郎は未だ曾て此問題を考へた事がなかつた。美禰子に愛せられるといふ事実其物が、彼女の夫（ハスバンド）たる唯一の資格の様のような気がしてゐた。云はれて見ると、成程疑問である。三四郎は首を傾けた。
「野々宮さんならなれる」と与次郎が云つた。
「野々宮さんと、あの人とは今迄に関係があるのか」
三四郎の顔は彫り付けた様に真面目であつた。与次郎は一口、
「知らん」と云つた。三四郎は黙つてゐる。（九）

三四郎の意識のなかで、美禰子との恋愛ということはあったとしても、夫婦関係ということを築いていけるかどうかということはなかったのであり、与次郎の指摘によりはじめて、美禰子との関係を夫婦関係にまで進めていけるのかということが意識される。また、野々宮と美禰子の関係ということも、それまでに野々宮が美禰子から受け取ったと思われる封筒（二）の描写や、菊人形を見に行く場面（五）など様々なところで、それまでに何かしら浅からぬ交流があったことが暗示されるが、この与次郎の言葉でそれが半ば証拠づけられる形となる。このように与次郎は人を食ったようであるが、三四郎の心境や置かれた状況ということを見抜いており、与次郎なくして三四郎は自身のことを客観的に見抜くこともできないのである。これについて斎藤英雄は「与次郎は三四郎に問いかけることによって彼の意識を明らかにしてやる覚醒者の役を果たしている。」（注十）とも述べている。同年代の若者として与次郎が三四郎の常に身近なところにおり、広田先生のように年の離れた先輩ではなく、近しいが多少の距離もあるところにいて、三四郎を引っ張る人間関係の発展や意識の深化に決定的な役割を果たしているのは明らかであり、「三四郎」が与次郎の存在なくして成り立たない小説であることは見逃しがたい事実である。三四郎も次のように思うところがある。

考へると、上京以来自分の運命は大概与次郎の為めに製へられてゐる。しかも多少の程度に於て、和気靄然たる翻弄を受ける様に製らへられてゐる。与次郎は愛すべき悪戯ものである。向後も此愛すべき悪戯ものゝ為に、自分の運命を握られてゐるさうに思ふ。風がしきりに吹く。慥かに与次郎以上の風である。（九）

三四郎自身がここで思うように、「三四郎」における主要な出来事は与次郎が膳立てしたことのうえに成り立っており、「三四郎」は与次郎の「愛すべき悪戯」の物語でもあると言えるのではないか。しかし、ここで「与次郎以上の風」が吹くというのも注目される描写である。確かに与次郎の「愛すべき悪戯」により出来上がる「三四郎」の物語であるが、物語はそれにとどまらず、最後の展開を見せていくのである。

三、佐々木与次郎の名前の意味「次」を「与」える男

ここまで見てきたように「三四郎」の物語は、佐々木与次郎という愉快な「愛すべき悪戯」者が作り上げた物語でもあり、三四郎は与次郎に「自分の運命を握られてゐる」と言える。しかし、三四郎は最後まで与次郎に運命を握られているのだろうか。最後に三四郎の運命と、与次郎という人物がもたらしている役割の本当の意味について見てしめくくりたい。

与次郎の「愛すべき悪戯」と、美禰子の大胆な振る舞いにより結果として三四郎は美禰子に借金をすることになる形になるのだが、与次郎の言うように「何時までも借りて置く」わけには三四郎の実直な性格をもってしてはいかず、実家に伝えてなんとか美禰子に金を返す工面をつける。そして画工の原口のもとにいた美禰子を訪れ、借りていた金を返そうとする。それを受け付けない美禰子だが、ここで三四郎は「ただ、あなたに会いたいから行ったのです」（十）と述べる。男女の関係にうぶであり、最初の汽車で上京する途中に女に翻弄され、「あなたは余つ程度胸のない方ですね」（一）と挑発されていたことから見ると、なかなかに「度胸」のある言葉でもあり、自らの意志で美禰子に愛を告白していることになる。たしかに上京してからの長いことを与次郎に先導されていた三四郎であるが、ここでは自らの飾らない気持ちを愛する者に告げており、与次郎の振る舞いとは関係なく、自立した意志を持った存在として行動して語るのである。もっともこの告白のすぐ後に、「背のすらりと高い細面の立派な人」が現れ、美禰子を連れて行ってしまう。

意外なことは続き、与次郎の勝手による広田先生の猟官活動は失敗に終わり、与次郎の策動したことが新聞に三四郎の運動によるものとして、「「偉大なる暗闇」などという論文を小雑誌に草せしめた」（十一）という誤った報道もなされる。「偽りの記事――広田先生――美禰子――美禰子を迎えに来て連れて帰った立派な男――いろいろの刺激がある。」と三四郎が床で思いをめぐらせるように、与次郎に「運命を握られてゐ」た三四郎の物語は、三四郎の思いもよらない形で三四郎自身に焦点が集まり、三四郎自身が考え行動する物語に終盤になって変化していくのである。与次郎に引っ張り回される形で進んでいた「三四郎」の物語が最後になって与次郎の存在は相変わらずだが、三四郎に寄りそうような様子になっていることがわかる。三四郎が風邪をひいて寝込むところで、与次郎が訪ねてきて話をすると

ころで、美禰子が結婚することを聞かされ、「慰藉のため」の話を聞く。

「馬鹿だなあ、あんな女を思って、思ったって仕方がないよ。第一、君と同年ぐらいじ　ゃないか。同年ぐらいの男に惚れるのは昔の事だ。八百屋お七時代の恋だ」

三四郎は黙っていた。けれども与次郎の意味はよく分からなかった。

「何故というに。二十前後の同じ年の男女を二人並べてみろ。女の方が万事上手だあね。男は馬鹿にされるばかりだ。女だって、自分の軽蔑する男の所へ嫁に行く気は出ないやね。もっとも自分が世界で一番偉いと思ってる女は例外だ。軽蔑する所へ行かなければ独身で暮らすよりほかに方法はないんだから。よく金持の娘や何かにそんなのがあるじゃないか、望んで嫁に来ておきながら、亭主を軽蔑しているのが。美禰子さんはそれよりずっと偉い。その代り、夫として尊敬のできない人の所へは始から行く気はないんだから、相手になるものはその気でいなくっちゃいけない。そういう点で君だの僕だのは、あの女の夫になる資格はないんだよ」

三四郎はとうとう与次郎といっしょにされてしまった。しかし依然として黙っていた。

「そりゃ君だって、僕だって、あの女より遥に偉いさ。お互いにこれでも、なあ。けれ　ども、もう五、六年経たなくっちゃ、その偉さ加減がかの女の眼に映って来ない。しかして、かの女は五、六年じっとしている気遣いはない。従って、君があの女と結婚する事は風馬牛だ」

与次郎は風馬牛という熟字を妙なところへ使った。そうして一人で笑っている。（十二）

慰めるつもりで言っているように見えることであるが、ここには与次郎のなかなか豊かな人生経験も込められており、三四郎の美禰子への思いを理解し同情しつつも、それがかなわないことを率直に語っている。与次郎は三四郎自身を左右することはないが、そばにいた者として三四郎が直面している現実の意味をさとす、もはや親友と言ってもいいような存在になっており、三四郎にとっても重要な人物であることは前にも増している。これに加えて、与次郎はかつて自身の関係した女とのことを話してみせる。与次郎が女をだましたような格好になるのだが、医科の学生であるなどと偽り「さう云ふ事も沢山あるから、まあ安心するが好かろう」と言って三四郎を笑わせ愉快にもさせている。

そして、与次郎に言われて野々宮の妹よし子を訪ねた三四郎は、美禰子がよし子が縁談を断った相手と結婚すると聞き、美禰子のいる会堂（チャーチ）に向かう。そこで、美禰子に借りていた三十円を返し、結婚する美禰子から「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」（十二）と懺悔めいた言葉を聞く。よく言われるのは、三四郎が美禰子に借りていた三十円を返すことで、二人の関係にひとつの決着がついたことが示されている、ということだが、考えるとこれはそもそも与次郎が生み出した借金であり、与次郎が生んだ悪戯もここでひとまず終わるということが言えよう。与次郎がいなければできなかった借金であり、美禰子への「愛の告白」であったが、美禰子の結婚、そして借りていた金を返すことにより、三四郎の美禰子への恋も終わり、与次郎の「愛すべき悪戯」も終わるのである。

最後の場面において、美禰子は画工原口によって「森の女」という題で絵のモデルとなり

丹青会に飾られる。そこでも与次郎は三四郎とともにいる。

野々宮さんは、招待状を引き千切つて床の上に棄てた。やがて先生と共に外の画の評に取り掛る。与次郎丈が三四郎の傍へ来た。
「どうだ森の女は」
「森の女と云ふ題が悪い」
「ぢや、何とすれば好いんだ」
三四郎は何とも答へなかつた。たゞ口の内で迷羊（ストレイシープ）、迷羊（ストレイシープ）、と繰り返した。（十三）

こうして「三四郎」という作品は終わるのだが、一つ注目すべきなのは最後まで三四郎とともにいるのは「与次郎丈」ということである。三四郎がさまざまな登場人物と出会い、刺激を受けながら物語が展開されてきた「三四郎」という小説であるが、最後にそばにいるのが「与次郎丈」というのも意味深いものがあるのではないか。「三四郎」は三四郎が美禰子に恋をする物語であるし、それ以外の登場人物たちのドラマもあるが、三四郎と与次郎の愉快な友情のうえに乗って展開された物語でもあるといえよう。当時の東京帝大をとりまく若者たちの味わい深い青春の物語としても「三四郎」は読まれるべきであるし、こうした生き生きとした若者を描いた作品であるから「三四郎」は名作として今も読まれるのであり、むやみに苦悩を描いた作品として「三四郎」を見るべきではない、とは以前に述べたことでもあるが、今後も「三四郎」を読むうえで必要な視点ではないだろうか。さらに三四郎は与次郎の問いかけに答えないが、美禰子が「森の女」などではなく、迷羊（ストレイシープ）という言葉で表される生きた葛藤を抱えた存在であることを理解している。独立した視点も持ちあわせている大人として成長していることも伺えるのである。与次郎に「運命を握られてゐ」た三四郎が、最後は与次郎を友として自身の意思を持つ物語として「三四郎」を読むこともできよう。

ここまで見てきたことをまとめてみたい。三四郎に美禰子が恋をするのも、言ってみれば与次郎が作り上げた人脈のなかに三四郎が入ってくるから可能となるのであり、「三四郎」を三四郎と美禰子の恋の物語と安易に読むことはできない。「三四郎」という物語は、その前からすでにいた広田先生や野々宮、そして美禰子といった人間関係のなかにまずは与次郎が入っていって、そこに三四郎が遅れてやってくるという二重の構造を取っている。そもそもは、広田先生が美禰子の兄である里見恭介の「その又上の兄」と「大変仲善」（五）であった事実があり、さらに野々宮と里見恭介の交友があって、美禰子もそこに関わっていくという三四郎が登場する前に成立していた人間関係があり、先行研究でとみに言われてもいるが、野々宮と美禰子が親密な関係であったことは間違いないことである。助川徳是は次のように述べている。（注十一）

広田、野々宮、原口、里見兄妹は、三四郎が現れるより遙か以前から長い友人関係を維持してきたのである。そしてそれは、野々宮宗八と美禰子の交際の歴史も、実質としてわずか一ヶ月に足りない三四郎と、美禰子の関係に比すべくもない長いものであったことを示している。

美禰子が結婚の相手として野々宮を考えていたことは、小説の中でそれを暗示する部分にこと欠かない。

「三四郎」が登場する以前に広田先生や、野々宮、美禰子らの人間関係があり、そこになんらかの物語があったというわけであり、そうしたところに与次郎が広田先生のもとにまさに「寄生」し、巣を張っていたところに三四郎が現れる。与次郎はそれまでの現実を三四郎に案内し、「次」を「与」える役目を果たすのである。ここに佐々木与次郎という人物の真価があり、単にユーモラスで人を食ったような姿勢で物語を引っ掻き回すだけというわけではないのである。いわば最初にあった物語が初めにあり与次郎という人物に「次」を与えられたところに現れた「三四郎」という物語なのである。三四郎といういわば白紙の状態にあった人物に東京での現実を与え、「三四郎」の小説として物語としての形を紡いでいくのが与次郎という人物であり、「三四郎」作中において極めて重要な役割を果たしている。

さらに言うと、「三四郎」までの夏目漱石の作品の多くには、「吾輩は猫である」の苦沙弥や迷亭といった人物、「坊っちゃん」における坊っちゃんや山嵐、「二百十日」での圭さんと碌さん、「虞美人草」における甲野さんと宗近さんといったユーモアあふれる主人公たちが多くの場合対になって登場しており、「三四郎」においても与次郎と三四郎はそうしたユーモアに満ちた登場人物の系譜を引いているともいえるが、「三四郎」を最後とし「それから」以降、こうしたユーモラスな魅力に満ちた登場人物は漱石の作品のなかに見なくなってしまい、強いて言えば対になる登場人物は「それから」の代助と平岡、「こころ」の先生とKといった具合であり、ユーモアとは無縁な人間関係に悩み、愛情や信頼といった人間にとって極めて重要な問題に葛藤する人物ばかりとなる。その傾向は「三四郎」において見られはじめ、主人公三四郎は美禰子の言う迷羊（ストレイシープ）といった言葉に悩み、相手の真意を測り兼ねて葛藤する。そして、結局その契機を作り出したのが与次郎という人物であり、夏目漱石の作品の流れのなかにおいても「次」を「与」える人物となっているのである。三四郎という人物を自らの意志で考える人間へと導き、「それから」以降の人間同士の情愛の問題で葛藤する物語を生み出す流れを作り出すのが、佐々木与次郎という人物なのである。与次郎は確かに三四郎をからかい、広田先生の世話になりながら迷惑をかけ、借りた金を馬券にするような人物である。しかし、一面で豊富な人生経験を持った男でもあり、シェイクスピアの文学などにも登場する「道化」としての役割を果たしていると言える。高橋康也『道化の文学　ルネサンスの栄光』に次のようにある。（注十二）

まことに「道化」とは「賢」なのか「愚」なのか、「狂気」なのか「正気」なのか、悪徳なのか美徳なのか、天使なのか悪魔なのか…。

おそらくそのような二者択一的設問の根拠となる枠組をとっぱらうことこそ、「道化」の任務なのである。同一の単語ではとうてい覆いつくせないはずの内容を含んだ「道化」という言葉に、われわれの近代的合理性神は苛立つ。「間抜け」は「白痴」とは違うはずだし、「瘋癲」とか「狂気」といった曖昧な言葉は厳密に定義されるべきだ、とわれわれは思う。しかし、そういう合理的識別の努力を嘲笑するのが、まさしく「道化」の本領な

のだ。

「賢愚」や悪徳や美徳といったことをとっぱらって、真実を示すところに真髄があるのであり、英文学に通暁していた夏目漱石がこうした存在の重要性を知らなかったはずはない。与次郎という人物は夏目漱石の明確な認識があって生まれた存在であり、洋の東西を問わず普遍的な意味をになう存在である。さらに与次郎という人物の名前に関連すると、中国の古典『老子』四十二章のなかに気になる記述がある。（注十三）

道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負い陽を抱き、沖気以て和を為す

「無という道は有という一を生みだし、一は天地という二を生みだし、二は陰陽の気が加わって三を生みだし、三は万物を生みだす。万物は陰の気と陽の気を内に抱き持ち、それらの気を交流させることによって調和を保っている。」といった意味であるが、広田先生らが一とすれば、与次郎によって作品の天地である物語「二」あるいは「次」が与えられる。そして、三四郎によって夏目漱石の後期の訪れが示され、万物を生ずるとも言える。そして、それらが調和された形で表されたのが「三四郎」という作品と考えることもできるのである。東西の文化に通じ、豊かな教養を持った夏目漱石だからこそ、生み出されたのが佐々木与次郎という人物であり、既存の常識を取り払い、後期の作品にも通じる道を作ったのがこの人物である。その重要性は軽々に見逃すことはできないのである。この論考では、佐々木与次郎という人物の果たしている役割について述べるとともに、その存在意義と夏目漱石の文学における価値について問題提起した。今後の作品研究のなかにおいて、なにがしかの意義を持つことができれば幸いである。

（一）岡本直茂「夏目漱石「三四郎」論―<迷える羊>への自覚―」（『阪神近代文学研究』第９号、平成二十年六月三十日）
（二）斉藤英雄「「与次郎」と「夜空」と「偉大なる暗闇」―『三四郎』側面」（『国文学研究』６３号、昭和五十二年十月）
（三）木村毅「早稲田大学と夏目漱石--「三四郎」の与次郎をめぐりて」（『早稲田大学史紀要』一巻２号、昭和四十二年一月）
（四）和田利男『漱石文学のユーモア』（めるくまーる、平成七年一月十日）
（五）吉村英夫『愛の不等辺三角形　漱石小説論』（大月書店、平成二十八年十一月十日）
（六）竹本公彦『三四郎と東京大学―夏目漱石を読む』（風詠社、平成二十九年六月一日）
（七）（注五）、前掲
（八）（注一）、前掲論文において論者は、「この論は三四郎の成長を認める意味において、長谷川泉らの示した「青春の自我形成史」「青春小説」という読みに近いものであると思う。しかし、長谷川泉らの論には現実と向き合う中での葛藤、人間と時代に立ち向かうという視点がやや弱く、三好行雄らが異議を呈する結果になったのであると

思う。この小説は青春小説であるが、広田先生や与次郎ら第二の世界に囲まれ、諧謔に満ちた文体のなか、三四郎が<低徊>しながら、その中で美禰子を愛する体験を通して、明治の人間の人生の葛藤、時代の問題点に目覚めていく<迷える羊>であることに気づき<大人>になっていく過程を描いた小説であり、そうした総合的な見方から捉えていくことにより、「三四郎」の主題が見えて来ると考える」と述べて、諧謔に満ちた文体のなかで同時代の問題と向き合うところから三四郎の成長があることに触れ、基本的に長谷川泉の論旨にそっていることを表した。

（九）長谷川泉「三四郎（夏目漱石）―現代文の鑑賞・その１８」(『国文学　解釈と鑑賞』昭和二十九年十一月）

（十）（注二)、前掲

（十一）助川徳是「『三四郎』の時間」（重松泰雄編『原景と写像　近代日本文学論攷』昭和六十一年一月、所収）

（十二）高橋康也『道化の文学　ルネサンスの栄光』（中公新書、昭和五十二年二月二十五日）

（十三）蜂屋邦夫訳注『老子』（岩波書店、平成二十年十二月十六日）

Natsume Soseki :Sanshiro　Remarks about Sasaki Yojiro
The character who links the whole story together.

Naomo OKAMOTO

Abstract

The following essay is based on Sanshiro, a novel by Natsume Soseki. Our study is centered on Yojiro Sasaki a friend of Sanshiro in the novel. Until now the role of Yojiro has not been really studied in spite of its capital lmportance. He is a trickster, even the choice of the ideograms of his name is remarkable , actually he is　an inescapable figure in the novel .

keyword

The jester /The lovable joker / Building Roman / trickster / Lao Tseu